

東日本大震災 福島第一原子力発電所の事故から6年

そして 7年目を迎えます

あの日から今までの時間は 「過去」ではなく「過程」

あの日に起きたことは 今あることのはじまり

“3.11 SAPPORO SYMPO”は

3.11を機に北海道へ避難や移住をした人

被災した地で「震災復興」とともに生きる人

そして その人々とともに歩む人の気づきと経験から市民が学び

まちづくりに活かすことを目的としています

それは「避難や移住した人たちが暮らし続けられる土壌を耕すこと」であり

同時に「だれもが暮らしやすい社会を育てるこつ」につながると信じるからです

3.11SAPPORO SYMPO

だれかの気づきや経験が、「ひと」をつなぎ、「まち」をつくる…サッポロ“シンポ”ジウム。

SYMPO ① 原発事故損害賠償・北海道訴訟 一国家・企業賠償を求める理由ー

伊藤 考一 (弁護士／原発事故被災者支援北海道弁護団 事務局長) / 聞き手: 金榮 知子 (北海道NPO被災者支援ネット 代表)



原発事故が起きてから2年3ヶ月が過ぎた2013年6月21日、札幌地方裁判所に原発事故損害賠償・北海道訴訟が提訴されました。当初43名だった原告は、現在79世帯262名。全国では同様の裁判が約20ヶ所で行われています。この裁判の被告は国と東京電力で、原告は原発事故によって「それまで築いてきた平穏な暮らしのものを失った」ことに対する損害賠償を求めています。自然災害に伴う予見不可能な事故、と主張する国と東京電力の根拠は?なぜ裁判を提起するに至ったのか?裁判の経過とともに伝えします。

SYMPO ② 避難を選択した女性たち コーディネーター: 宮戸 隆子 (こだまプロジェクト 代表)

こだま
プロジェクト

思いもよらない困難に見舞われることは誰にでも起こりうること。

震災と原発事故後、北海道への避難を決めた時から、ひたむきに、自分たちの選択と向き合いながらくらしてきました女性たちがいます。「震災や原発事故がなかったら、人生で考えることもなかった選択肢」が、次々と目の前に提示される中、彼女たちは迷い、悩み、その時々の最善を選びながら、今、新しい生活を築きはじめています。決して楽ではないんだけど、そこには学ぶべき生き様があります。

SYMPO ③ 事例報告: 女川町の現在 荒井 宏明 (一般社団法人 北海道ブックシェアリング 代表理事)



日本有数の美しい漁港「女川港」を臨む宮城県女川町は、東日本大震災によって800人以上が死亡・行方不明となりました。この災害で最も人的被害の割合が大きな自治体であり、まちの再建にも長い年月がかかりました。いま、新設されたJR女川駅からひろがる町並みや、港湾の加工場など、部分では美しく近代的に整備されましたが、一方で、震災後に仮設住宅に入居した町民の8割が、そのまま「仮設暮らし」を余儀なくされています。「暮らし」はまだまだ災害の影響下にあり、町を見切って出て行く住民も少なくありません。北海道ブックシェアリングが同町に足を運んだのは震災の2ヶ月後でした。それから6年。その間の、まちの移り変わりと現状の報告をします。

SYMPO ④ 今を伝える写真展



渡邊 恒一 (株式会社 ギガデザイン 代表)

千葉 正和 (一般社団法人 北海道ブックシェアリング 理事)

聞き手: 中脇 まりや (みののくids 初代代表)

昨年に引き続き、岩手・宮城・福島の三県の「今」を写真で伝えるプロジェクト。震災と原発事故から6年が経つ今、様々な「現実」を踏まえた中にある東北の光景を、NEUTRALな視線で撮影した「今を伝える」活動の報告です。

SYMPO ⑤ 札幌市の被災者支援活動 ーこれまでとこれからー



野澤 淳史 (日本学術振興会特別研究員)

専攻は環境社会学、障害学。大学学部生のころより、公害の原点ともいわれる水俣病問題に取り組んでいます。

東日本大震災発生後、福島原発事故の影響を受ける障がい者に対する調査を経て、現在は札幌市をはじめとして北海道に自主避難した人々やその支援者への聞き取りを続けています。

水俣病問題を通して、原発事故の今、そして、これからを考えていきます。

SYMPO ⑥ 地域住民の復興 ーその明暗を分かつものー



千葉 一 (一般社団法人 前浜おらほのとつおき 理事／東北学院大学非常勤講師) / 鈴木 玲 (北の里浜 花のかけはネットワーク 代表)

東日本大震災後、人々は甚大な被害と多くの命を失った悲しみを抱えながらも、震災が起きなければわからなかつた「気づき」を感じはじめていました。それは、忘れられていた過去からの伝承や、自然とともに暮らすことへの畏敬の念であり、被災地に暮らす人々は、少しずつ、再建に向けての思いや願いを描きはじめました。しかし、加速度的に姿を見せはじめた「復興ビジョン」は、人々の「気づきや願い」とは裏腹の「なぜ?どうして?」の連続です。様々な葛藤と戸惑いがありながらも、地域と自然と自分たちの営みを守るために活動する、気仙沼市本吉町前浜地区の人々のこと、そして、震災から6年が経過する被災地が教えてくれる現状の報告です。



まちはもっとシンボする。
ひとはもっとシンボする。

3.11SAPPORO Live

音楽で思いをつなげるミュージシャンによるライブ&トーク。

アンサンブルグループ／奏楽(そら)

札幌交響楽団のオーボエ奏者、岩崎 弘昌と道内の若手演奏家によって2008年春に結成された演奏団体。北海道の隅々で生の音楽を届けている。地域のコンサート、学校、病院、福祉施設などふるさと北海道にもっと笑顔を届けられるよう活動中。震災後には継続的に被災地を訪問し、音楽での絆を繋げている。



華と夢の音楽暖

震災後、チャリティライブなどを続けるトランペッター“yoshito”率いるスペシャルユニット。札幌を中心に活躍するバンド「地下室とシャンパン」のVo.HARU、角田 好史(ジャズドラム)、奥山 舞(二胡)、春日 舞(ピアノ)、小林 勇希(ベース)が、暖かなメロディーにのせ、東北への思いを伝える。



ムックリタッチ&ミー

モノノケユースケ(Vo.)、えり花(Pf.)、ヨーコ(B.)、ゴツ(Dr.)で2001年結成。札幌近郊を中心にライブ活動を展開し、昨年12月にはバンド結成15周年ライブを行う。震災後、チャリティライブの出演や関連イベントを主催。2015年12月にはモノノケユースケが支援イベントで東北を訪問。「陸前高田で多くの被災された方と出会い、感じたのは、いのちと生活の大切さです。自分の身近な人の幸せも願いながら、東北に思いを馳せて歌います」



吉川Family Presents「僕らの街から」

STVアナウンサー 吉川 典雄、札幌出身の4人組バンドTRIPLANE、北海道出身の河野 玄太が、2011年に立ち上げたチャリティライブイベント。

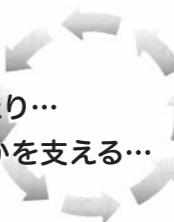
吉川 典雄、TRIPLANEのボーカル 江畑 兵衛とドラム 広田 周、河野 玄太の4人にによるライブ&トーク、そして、イベントでしか歌われていないオリジナルソング「輪になつて」を演奏。※午後2時46分には、会場にて黙祷を行います。



3.11SAPPORO Charities

ここで、買ったものがあなたを幸せにしたり、笑顔にしたり…

ここで、お買い物をすることが寄付につながり、だれかを支える…めぐりめぐって大きな輪になる。



北海道ブックシェアリング | 古書販売



一般社団法人 北海道ブックシェアリングは、図書関係者と教育関係者によって2008年に設立。東日本大震災の半年後、宮城県石巻市に分室を設置し、1年半に渡って「読書環境の復旧・復興」を支援。図書館や公民館図書室などの再開を手がけた。読み終えた本の再活用、読書イベントや読書指導などを通じ「格差のない読書機会」を目的に活動している。支援先の陸前高田市より譲り受けた移動図書車を利用し、2016年に道内の無書店自治体を巡る活動「走る本屋さん」を実験的に開始。

3月12日(日) 札幌／わくわくホリデーホール(札幌市民ホール)第1会議室、13日(月)江別／ばーどらんど(大麻銀座商店街)、15日(水)千歳／千歳まちライブラリー 研修室にて「3.11映画祭」を主催・運営し「太陽の蓋」(2016年)を上映。詳細問合せは、Tel.011-378-4195まで。

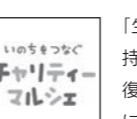
手仕事よりそい隊 結☆結&ペングアート 小物販売・アート作品販売



「手仕事よりそい隊 結☆結」…被災地の仮設住宅などでつくられた小物の販売を2011年から継続。

「ペングアート」…2011年に児童デイサービスペングアートとして開所。自閉症などの子どもたちにアートを通じた療育を実践。福祉の枠を超えたアートイベントなども開催。宮城県東松島市「小野駅前応急仮設住宅」でつくられている人形「おのくん」の似顔絵ポストカードの制作や、アート作品のチャリティ販売に取り組むことで、子どもたちに東日本大震災を伝える。

いのちをつなぐチャリティマルシェ 道内チーズ工房のチーズと東北物産販売



「生産者である農家の思いに、消費者の思いを重ね合わせ、北海道からたくさんの応援したい気持ちを被災地に届けたい」そんな思いから生まれたマルシェは、2011年3月に全国で最も早い復興支援チャリティイベントとして開催。今回で12回目。単なる物販ではなく、「今、じぶんたちにできること」を考えながら、「いのちをつなぐ」農家+消費者の協力の仕組みを広げていく場。

編んだもんだら ワークショップ・アクリルタワシ販売



「編んだもんだら」とは、アクリル100%の毛糸で編んだあみぐるみのような洗剤いらずのエコタワシ。震災以降、生活の環境が激変した東北に暮らす女性達の生きる力を、コミュニティビジネスとして発信していく「さざなぎ」プロジェクトの一環として、女性の「手しごと」を発展させる目的でつくられています。編み手は南三陸町、気仙沼市で津波被害にあったお母さん達。代金500円のうち40%は編み手、残りは原材料費と活動資金となります。

会場では、毛糸と編み針のセットを用意し、「さざなぎ」仕掛け人の足立 千佳子さん指導による「あみあみワークショップ」を開催。参加費は、材料費と編み方指導込みで1000円。テーブルを囲んで手しごとを教えてもらしながら被災地のお話をうかがい、参加費は支援につながります。

10日(金)

10:00	チカラでつながる3つの思い HTB ほつかいどう防災ひろば
10:30	
11:00	Live 奏楽(そら)
11:30	
12:00	SYMPO① 原発事故損害賠償・北海道訴訟 伊藤考一 聞き手: 金榮知子
12:30	
13:00	SYMPO② 避難を選択した女性たち 吉川 Family Presents 「僕らの街から」
13:30	チカラでつながる3つの思い HTB
14:00	
14:30	SYMPO③ 事例報告: 女川町の現在 荒井 宏明
15:00	
15:30	Live 華と夢の音楽暖
16:00	SYMPO④ 今を伝える写真展 渡邊恭一 千葉正和 聞き手: 中脇まりや
16:30	
17:00	SYMPO⑤ 事例報告: 女川町の現在 荒井 宏明
17:30	
18:00	
18:30	SYMPO⑥ 地域住民の復興 千葉一 鈴木玲
19:00	今を伝える写真展 渡邊恭一 千葉正和 聞き手: 中脇まりや
19:30	
20:00	

11日(土)

チカラでつながる3つの思い HTB ほつかいどう防災ひろば	
	Live ムックリタッチ&ミー
	SYMPO⑤ 札幌市の被災者支援活動 野澤淳史
	吉川 Family Presents 「僕らの街から」
	Live 吉川 Family Presents 「僕らの街から」

きぼうのワークショップ 参加無料

北海道が企業・団体との連携により木育の一環として取り組んでいる「東北にきぼうでメッセージを贈ろう! ~希望を~」プロジェクト。会場では東北の子どもたちにむけて、バーニングペン(電熱ペン)で木の棒にメッセージを書き込むワークショップを開催。集められた「きぼう」は木棒とセットで「きぼうのブール」として被災地の子どもたちに寄贈されます。メッセージの書き込みは15分~20分程度。



小学生以下の
お子さまは
保護者同伴